

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第六部

第三十七章

Dear my friend - 1

— 親愛なる友よ -1—



峯村 明

目次

Dear my friend-1	
お願い	2
登場人物	3
Dear my friend-1	5
あとがき	17
奥付	18

Dear my friend-1

お願い

ダウンロードありがとうございます！

さて、ただ今『リ・コンストラクション』をリライト中なわけですが、

第二十三章・初版(2025年7/31発行)～最終章・初版(2026年2/15発行)をお持ちの方は、そちらを処分していただき、とにかく、無視してください！

リライト版は初版とはかなり違う展開になっていますので。
(2026年7/25以降発行が新しい版です)

26年10月29日 記

登場人物

リ・コンストラクション37

桧山 健	H&L財団・財務部門勤務
マックス・ペイリー	古生物学者
レル・ヴァリス	H&L財団・医療チームのリーダー

cast37.JPG

Dear my friend-1

348.

「友よ」、と彼は姿勢を正して言った。「世話になった。礼を云うよ」

「いや……礼ならオレよりレルに……オレは大したことしてないし」

「うーん。そうだった。ヒヤマンここに転がり込んで、レルに助けられたんだもんな。なにがどうなってるんやら」

マックス・ペイリーはしみじみと言ってからソファにどすんとお尻を落とし、両足を投げ出した。この方が彼らしいと健は思う。

「それでさ、本気なのかペイリー——」

「おお。止めるなよ、もう決めたんだから」

マックス・ペイリーはオーストラリアの大学の研究室で古生物学者をやっていた。しかし、ゴビ砂漠のどこかで化石を発掘しているときにトラブルに巻き込まれ、桧山健を頼ってベルギーまで逃げて来たのだが、追跡者がいた。

アルチニアという女が現れて追跡者をかわしてくれたが、アルチニア本人が警察から追われていた。彼女たちがブリュッセル郊外の隠れ家に潜んでいるところを襲われ、逃げ出したタイミングでレル・ヴァリスの救急車に発見された、と、かいつまむとそういうことである。

アカデミックな研究者を、何故トラブルが襲ったのか。ペイリーは何故命を狙われたのか。彼を助けた側のアルチニアは何故警察から追われているのか。

「巨人のホネさ。それが発端で原点でとどのつまりなのさ」と、ペイリーは言う。

「この世の歴史に巨人なんてものは存在しない。聖書にはネフィリムというのがいたって書かれてるが、書かれてるってだけ。いた証拠がない。証拠がなきゃあ、いたことにならん」

「けど、俺はこの目で見た。全長5^{メートル}の、人間の全身骨格を」

「中生代後期という地層からだ。ゴビ砂漠自体がそういう地層が露出している。だから中生代に生きてた恐竜の化石が埋まってる。

6,500 万年前、あの有名な、子どもでも知ってる恐竜絶滅の時が来て、中生代白亜紀が、爬虫類の時代が終わった。

そして、哺乳類の時代に入ってなんだかんだあって類人猿が登場するまで 4,000 万年もあって、さらになんだかんだあって 1,800 万年のち、今から 700 万年前のヒトの化石（※）が現生人類のご先祖らしいんだ。恐竜が絶滅して人類が現れるまで、ざっと 6,000 万年かかってることになる。それが今の学説というやつだ。

じゃあ、俺が見た巨人のホネはいったい何なんだ。恐竜が生きていた頃と同じ地層に埋まっていたホネは。

ありゃあ……もしかしたら巨人じゃなかったかもしれん。巨人じゃなくて、人類のだったかもしれん。当時の地球の重力、大気の組成が巨大な爬虫類を生み出していたように、人類も、でかかったのかもしれん。まあ、それにしたってな。笑っちゃうぜ。

ー注ー

（※）サヘラントロプス・トゥーマイ猿人

349.

ダーウィンの『種の起源』、名前くらいは知ってるだろ。1859 年にチャールズ・ダーウィンが発表した本で、生物は自然選択（※1）によって進化することを論じている。自然選択とは、「変異・遺伝・選択」という 3 つのプロセスが積み重なることで、生物の集団が世代を超えて変化していく。と、ダーウィンは考えた。

このサイクルが何万世代と繰り返されることで、集団全体の特徴が少しずつ変化してい

く。これが「進化」の正体だという。

と、いうと、どんな難しい論文かと思いきや、これがロンドンで発売と同時に初版 1,250 冊が瞬く間に完売した。学者先生が自分の研究を二十年にわたって練りに練って、一般人向けにわかりやすく書いた、ひじょうに読みやすい本だったんだ。

当時、イギリスでは自然哲学が大きなブームになっていて、生物の進化に関する著作はすでにいくつも発表されてて、受け入れられる素地はあった。そこへダーウィンが火をつけたわけだ。

多くの人が刺激され、そして大論争が巻き起こった。

自然は誰かが設計したんじゃない。ただ、有利な変異が生き残ってきただけなんだ。その考えは、神が生物を創造したという、キリスト教の世界観を根底から覆すものだったからだ。

考えてみなよ、『あんたのじいさんの家系は猿か、それともばあさんの家系が猿か』（※2）なんて問いが、神学者に受け入れられると思うかい？ まあ、神学者じゃなくなつて、な。

ダーウィン本人は神学者になることも考えた人で、自分の著作が教会と対立するだろうって最初からわかってた。だから『種の起源』初版には「創造主が最初の生命に息吹きを吹き込んだ」なんて一言を入れて衝突を避けようとした。

それでも『種の起源』の影響力には凄まじいものがあった。

実際、ダーウィン自身、彼の説に反発した古い友人に背を向けられたそうさ。

『種の起源』出版後、1894 年にジャワ原人（※3）に関する報告が発表されたんだが、この発見がひとつの基準となってしまった。

19 世紀にはじつに数多くの考古学的発見がされている。なかには思いもよらないほど年代の古い地層から見つかった骨、石器、解剖学的に現代型の人骨化石、等々。なのに、この基準から外れるという理由で脇に寄せられてしまったものがある。それも山ほどある。

初期人類やその道具の証拠は人類進化の定説に合っていればすぐに受け入れられる。

だが、定説に合わない証拠は、信頼できるものでも、無視されるか、抹殺されてしまうことすらある。文献から外され、もともと存在しなかったかのように、跡形もなくなってし

まう。その結果、初期人類の歴史について定説の向こうを張るような解釈が信用を得るのは事実上、不可能となる。その解釈を裏づけたはずの証拠がもう手に入らないからだ。

歓迎できない証拠はふるいにかけて排除してしまう、そういう作用が学会にはあるんだ。理論的先入観、支配的な同意というというやつでな。

—注—

(※1) 時間の流れで自然と淘汰されていくという意味の「自然淘汰」が多く使われるが、原題に従うと「自然選択」

On the Origin of Species by Means of Natural Selection, or the Preservation of Favoured Races in the Struggle for Life

『自然選択という手段、または生存闘争の中で好ましいとされる種が保存される事による種の起原について』が原題

(※2) オックスフォード進化論争

(※3) ジャワ原人は類人猿と現生人類とをつなぐ、最初の現生人類・ホモ・エレクトス。中期更新世...約258万年前から約1万年前までの期間...の地層で発見された

350.

話は元に戻る。

だから、恐竜の時代のヒト...サイズの大小に関係なく...の全身骨格なんてものが、受け入れられるわけがない。そんなの、火を見るよりも明らかだ。

過去には人類学者が外部の圧力で上司ごと解雇されたなんて例もある。

そいつはカナダのある博物館に属してて、ヒューロン湖の島で石器を発見した。シェギアンダの、もっとも近年に見積もっても3万年前の氷河期堆積層からで...石器発見の数年前には地質学者が四、五十人、研修でこの遺跡を訪れていて、彼らからは氷河期堆積層だということに異論はでなかったというんだ。石器はその層から見つかったんだから、

3万年前以上前のものだ。証人が四、五十人もいたんだぜ。

しかし北米に人類が渡ったのは12,000年前とか20,000年前とかのことで、古代に人類はいなかったことになってる。そうになってるんだ。だから3万年前の石器なんて定説からはずれてるものは、完全にアウトさ。定説論者たちに突き上げられて発見者の人類学者は失職、博物館理事など、失職した上に亡命しなければならなかったっていう、にわかには信じがたい顛末だ。

あぶない物件に関わっちゃうと、本人だけじゃなくて所属する組織まで危険なことになるんだよ。

そういう時代がかれこれ百年以上も続いてるんだ。

ヒューロン湖という名称に、健はちらりとレル・ヴァリスを見やった。二万年前、あの辺はエウメロス王国の版図の内だったはず。

一個人があがいたところでどうにかなる状況じゃない、とペイリーはいった。恐竜時代の地層から巨人の骨なんてものを見つけちゃった時に、俺の学者生命は終わったのさ。

とりあえず、乾杯しよう。マックス・ペイリーの古生物学者生命の終焉に

巨人の骨発見現場に居合わせたおかげで、思いがけないことがわかったぞ。
古代の遺物発見者の敵は定説論者^{かたき}だけじゃなかったんだ。道が閉ざされるだけじゃない。文字通り、抹殺されるんだよ。よほど知られたくない理由があるってことじゃないか。

アルチニアが警察に終わっていたのと同じ構図だ。警察、官憲、つまり社会を構成している組織が知られたくない“何か”を、アルチニアは知っているということだ。

深刻な顔をした三人の前で、スパークリングワインが室内の照明を金色に弾いている。

きら、きら、と。

どうやらそれは、恐竜時代に巨人が生きていた以上の、危ない事実らしいんだな。

胸が躍るぜ。こんな気持ちは久しぶりだ。学者としての俺じゃない、マックス・ペイリーという人間の好奇心と探求心だ。

俺は知りたいんだ。本当の事を。

351.

「どうした、レル。やけに神妙な顔してないか？」

ペイリーはつとめて陽気に声をかける。彼にしてみれば十五歳の少年のイメージが強いレルである。今生の別れのような今宵の集まりに感傷的になっているんだろうと、レルを観察していた。

そのレルは、「うん……ペイリー……」と、言い淀む。
「その、『ダーウィンの進化論』で、ようするに、生物は進化してきた、そういう話だよね」
「まあ、そういうことだな」

「ペイリー」「なんだよ」「聞いてくれる？　今まで黙ってたことがあるんだ」「なんだなんだ、おまえの秘密か？」

「僕は……アトランティスという文明で生きていたことがある。記憶があるんだ。僕だけじゃない、うちの医療チームのメンバーほとんどがそうだ。ヘルガも、バーネット教授も」

「……………」

「……驚いた？」

「いやー……ヒヤマがアルチニアとわけのわからん話で盛り上がったから、もしや、まさか、そういうことかと思ったんだが……レル、おまえもか……」

「うん……アルチニアさんとは面識がないけど、健とはじっさい会ってる。同じ時期に生きてたんだ」

しばし呆然とするペイリーである。が、「そんな話を持ち出したからにはなんかわけがある。だろ？」

「たぶんペイリーには……すごく興味深い話だと思う。いつか話そうと思ってたんだ、どうやら、今がその時みたいだ」

352.

レルは語る。

バーネット教授はアトランティス大陸の東部、エウメロスという国の王室付医師だった。彼はこう言う。

『当時の人間と現代の人間とでは、解剖学的に明確に異なっているものが、少なくとも三つある』

そのころ僕は軍の人間で、医学とか解剖学とかには、まるで疎かった。だからこれはバーネット教授の見解だ、と、レルは前置きして続けた。

レル　　：三つのうちのひとつは、血液だ。

当時は Rh マイナスの人間が多かったというんだ。今はどう？　圧倒的に、Rh プラス型が多い、Rh マイナスはものすごく少ないって、たぶん誰でも知ってる。ほんの一万年から二万年の間に……変な言い方だけど……マイナス保有者とプラス保有者の数が逆転してしまったということだ

そもそも Rh とはなんだ。Rhesus macaque の最初の二文字から来ている。Rhesus macaque とはアカゲザルのことだ。アカゲザルの赤血球と人間の赤血球が、同じモノ（D 因子）に反応するとわかっている。反応があると陽性（Rh プラス）、反応しないと陰性（Rh マイナス）。

かつてはマイナスが多かった、というよりも、マイナスしかいなかったらしい。それが、

今じゃプラスが多いんだ

健　　：アカゲザルと人間はまったくの“他人”だったのに、いつかどこかで……人類の血と猿の血が混……しかし……なんだっけ、染色体の数の関係でそういうことは起こらないんじゃないかったっけ？

ペイリー：……あぶない話題だなあ

レル　　：うん、でも、まずそのことを頭に入れておいて。

アトランティス人と現代の人間とで、明確に異なっているものその二。寿命だ。アトランティス人の平均寿命は千歳だった。千歳。現代人は百歳そこそこ。

その三は、DNA 鎖。現代人は二本の螺旋だが、アトランティス人は十二本だった」

ペイリー：……………

健　　：血液や DNA 鎖はピンとこないが、寿命が十分の一になってるって？ どうして——

ペイリー：ホモ・エレクトス（※1）から進化してネアンデルタール人（※2）の時代があり、さらに進化してネアンデルタールとは別の系統に現生人類が現れた。解剖学的現生人類が登場したのがおよそ 20 万年前だというのが定説というやつだ。ただし、それぞれの種の間を繋ぐべき種、中間種は見つかっていない。じつはダーウィン本人は、人類に関しては進化論はあてはまらない、と言ってる。それくらい、謎だらけなんだ。

思うんだがな。現生人類ホモ・サピエンスはホントに進化したんだろうか……

レル　　：そう思う？ ペイリー

健　　：寿命が劇的に短くなったというのもおかしい話だ。進化したんなら伸びてよさそうなものだ。それに、アカゲザルと人間の血液の話からして——今の人間の圧倒的多数は猿とのハイブリッドということになるのか？

レル ：ケン、そう思うんだね。

バーネット教授の考えはこうだ。

『私自身がアトランティス時代の記憶を持って現在を生きている。身体的特徴も性格もかつてと似通っている。つまりこの身体は当時と同じ遺伝子を持っている、あるいは憶えている。

だが、DNA 鎖は十本も減ってしまった。寿命は極端に短くなり、血液はかつてはなかったはずの Rh 因子（※3）というのを持っている。私が生きていたかつての世界は二万年前だ。二万年を経て転生してみたら、質的にまったく違う肉体だった』

『退化した、あるいは劣化した、というのが正直な感想だ』

『私の身体は、操作されたのではないか。そう感じる』

—注—

（※1）・原人。代表的なジャワ原人はおよそ 130 万年前

（※2）・旧人。およそ 4 万年前に絶滅

（※3）・ヒトの赤血球がアカゲザルの赤血球と共有している抗原因子（Rhesus factor）
=D 因子

353.

レル ：オリエントという土地に、僕はこどものころから興味があった。ティグリスとユーフラテス、二つの大河に挟まれたメソポタミア。人類最初の文明が興ったというこの地域は、なぜか紛争が絶えない、災害が多い。よって、死傷者がでる。医者が必要になるのさ——

ふしぎな土地ではあるよ。『メソポタミア』はギリシア語だし、そこで興った『シュメー

ル』はアッカド語、シュメール人自身は自分たちを『キエンギ』と呼んでいた。そもそもシュメール人がどこから来た何者なのかわからない。シュメール語に似た言語がどこにもない。

シュメールの神話がまた興味深いんだ。

紀元前 3000 年紀、最初期のシュメール文学にはアヌ（天空神）、キ（地母神）、エンリル（大気の神）、エンキ（淡水の神）の 4 柱の神々が登場する。（※）

天空神アヌと地母神キとの間にエンリルが生まれ、やがてエンリルは母である地母神を妻にし、替わって地上界の支配者になった。この二名の間に生まれた神々の重労働を肩代わりさせるために人間が生まれた。人間を作るに当たってエンキが粘土をこねたという、つまり、天地開闢と人類創造の物語なんだが、この『作られた人間』がホモ・サピエンスで、三十万年前のことだと、粘土板に記されている（出所不詳）。

じつはシュメール文明に先行するウバイドという文明があるんだけど、これがシュメール以上にわからない。ただ、遺跡を調べてみると、ウバイドからシュメールへ連続性があることはわかっている

ペイリー：ウバイドといえば、衝撃的なアレだ。イラク南部のテル・アル＝ウバイドの遺跡で発見された、直立するリザードマン像。体は人間だけど、頭部はヘビかトカゲをありありと思わせる。おどろくほど写實的に作られてる。一つや二つじゃない、複数だ。崇拜の対象、神さまだったと考えて間違いはないだろうさ

健　　：今の話をたどってみると、こういうことか？　シュメールには『意図的に人間を作った』という神話がある。その神々はトカゲの貌をしていた。

ペイリー：俺はもう学会とは無関係、なんでも言える身分になった。だから言わせてもらおう。ホモ・サピエンスはトカゲが労働をさせるために作った、退化した人類だ。

レル　　：それ、バーネット教授や僕が考えたのと同じ結論だ。

(※)・シュメールの神々はそれぞれ特定の都市国家と結びついている。(例・アヌとウルク市、エンリルとニップル市、エンキとエリドゥ市)

都市国家がそれぞれ自分たちの神を中心に考えたため、文書ごとに親子関係が違い、したがって、系図はひとつに定まっていない。

354.

健 : オレはエウメロス人の国民性というのをよく知ってる。堅実で、真面目で、現実的な人たちだ。ペイリーが言うと乱暴な推論に聞こえるが、エウメロスの王室付医や、王室近衛隊長の精神を背後にもつおまえたちが言うことなら間違いはないだろう

ペイリー : なんだよ俺よりレルの方が信用できるんか。ケン、そういうおまえはどうなんだ？

健 : レルやペイリーの出した結論は、陰謀論といわれてる。うっかり口にしたら世間から嘲笑され、相手にされなくなるやつだ。

よって、社会に対して責任を負う立場にあるオレは、わるいが、関わりあいたくない。

しかし、直観なんだが、ペイリー、アルチニアが官憲に追われていることと、今の話は繋がってる、そんな気がするんだ。

この期に及んで、伏せておくこともないだろうから、オレからもうちあげよう、ペイリー。

アルチニアを追っているのは警察だけじゃない。警察の背後にいるのは死神だ。おそらく、ゴビ砂漠でおまえたちを襲い、発掘現場を粉碎したのもやつの仕業だ。

なぜ粉碎したかって？ 『人類は進化してきたという枠組み』から外れる証拠は要らないからだ。

ペイリー : 死神だと～なんてこった～

そうだ、証拠隠滅といやあ、思い出したぞ、隠れ家に放火された時、アルチニアの仲間のレガリオがなにか貴重品らしきものを持ち出そうとしていた。それがえらくヤバいモノだったらしくて、しつこくがんばった彼は逃げ遅れ、大やけどを負っちゃった。貴重品はアルチニアが諦めさせた。あの爆発は貴重品を放棄し破壊した結果の自爆さ。

アルチニアの隠れ家を去る朝、H&L 財団の人間としての健とアルチニアが一緒にいるところを撮影したのは死神だと、イリチャは言った。死神はアルチニアを利用して H&L を社会的に陥れようとしていたのだと。

アルチニアは犯罪者であり、さらにスキャンダラスな “いわく”.....不道德な何か.....を持っているらしかった。それがどのような犯罪であり、スキャンダルなのか、知ろうとすることに意味があるとは、健には思えなかった。官憲の側に死神が憑りついていることが問題だった。

死神
やつは何をしようとしているんだろう。健の関心はその一点に集中しようとしていた。冥界王に仕えるフリをしてイリチャを手にいれようとしたのは何故だろう。

マックス・ペイリーの、アルチニアと行動を共にするという決意は固く、健たちは友人として知る限りの情報を提示する以外に、彼らにしてやれることはなかった。

ただ乾杯して、友の門出を見送るだけである。

あとがき

一ヶ月も空いてしまいましたですね。お久しぶりです。

今回の表紙の背景は第四章『Exciting vacation』と同じものです。学生時代の夏休みを懐かしむ三人、の図。

さて、前半のダーウィンについては『人類の隠された起源』M. クレモ R. トンプソン
共著 翔泳社 から

調べてみたら、M. クレモというお人はヴェーダの研究者（R. トンプソン氏は数学者）。
なんか、さもありなん、と思いました。ヴェーダは神智学の情報元でもあるはずで、ダー
ウィンの進化論に異論を抱くのは当然。

『人類の隠された起源』（『禁じられた考古学・（邦訳はない）の簡易版』）は、案件ひと
つずつ、発見場所、発見年、関わった人など、驚くほど細かく追跡していて、実際の遺
物の価値と学会の評価との間にいかに落差があるかということを、綿密に説いていて読
みごたえがあります。（正直、ちょっとしんどい）

ヴェーダでは人類の起源は数百万年前に遡ると言ってるようですが、minemura は読ん
だことがないので、参考までに神智学の進化論、人智学の進化論、ついでにホツマツタ
エの年表なんかをあげておきます。なかなか興味深いです。

後半の焦点、『ホモ・サピエンスは退化した人類ではないか』はクレモ氏の発言でもあり
ます。

次回のサブタイトルも『Dear my friend』で、2。もうひとつの友情のお話。あとは表紙
作だけなので、時間おらずに UP できると思います。

2026 年 10 月 29 日 記

奥付

リ・コンストラクション

第三十七章 Dear my friend-1

2026 年 10 月 30 日 初版発行

著者 峯村 明 E-mail dbailai388@gmail.com

表紙素材 「写真 AC」 「Chat GPT 」

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社

℥ Akira Minemura 2025-2026

著 者 峯村 明
撮 影 写真AC
イラスト Chat GPT

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社